ヤブマメのたくましい花（10月の自然庭園では）～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

ヤブマメのたくましい花（10月に自然庭園で観察できる動植物について）

自然庭園では、清らかな秋と書く清秋（せいしゅう）の言葉が示すように、青く澄んだ空が広がる季節を迎えようとしています。今月は自然庭園の歩道の傍らで、ひっそりと花を咲かせているヤブマメについて、お話をさせていただきます。

ヤブマメは、マメ科ヤブマメ属に分類される、つる性の一年草で、成長すると長さ2メートルほどに達することがあります。名前は、藪に生える豆からと言われていています。
花は、マメ科共通の蝶の形をした蝶形花(ちょうけいか)と呼ばれる構造をしていて、上側に白旗（しろはた）の旗に弁当の弁と書く旗弁（きべん）と呼ばれる薄紫色の大きな花びらがあり、下側に翼の弁と書く翼弁（よくべん)と呼ばれる白色の花びらと、船の底の中央で強度を上げることを目的とした竜の骨と書く、竜骨（りゅうこつ）に由来する白色の竜骨弁（りゅうこつべん）があります。

ヤブマメの花はその名からは想像できないほど可憐で、きれいな花なのですが、地上に開放花（かいほうか）と呼ばれる普通の花と、地上と地下のそれぞれに閉鎖花（へいさか)と呼ばれる計3種類の花を咲かせることが知られています。
開放花には3個ほどの種子が入った、豆に果実の果と書く豆果（とうか）が作られるのですが、閉鎖花の豆果には、大きな種子が1つだけしか作られないそうです。
これは、開放花が、他の家の受粉と書く他家受粉（たかじゅふん）により、新たな遺伝子を持つ軽い種子を、熟してはじける際に複数飛ばし生息域を広げるのに対し、閉鎖花は、自分の家の受粉と書く自家受粉（じかじゅふん）であるため親と同じ遺伝子を持つので、同じ場所ならば確実に生育することができるし、大きな種子であれば自ら蓄えている養分を使うことで、より確実に命を繋いでいくことができるからなのだそうです。
それでは地上の開放花と地下の閉鎖花だけで、地上の閉鎖花は必要ないのではと思うのですが、ヤブマメは林のふちのように陽の当たる明るいところと日陰になる暗いところのはざまに生息するため、生息域が何らかの理由で変化したとしても大丈夫なように、より多くの生存手段を持っているのだそうです。
実際、開放花の種子は他に運ばれても大丈夫なように固い殻で守られていますし、生息域が暗くなると、まず開放花を減らし、次いで地上の閉鎖花を減らし、最後には地下の閉鎖花だけ残すようにと段階的に対応していくこともできるのだそうです。
なんともたくましい花ではないでしょうか。ヤブマメの花言葉が「生命力の強さ」と「二股」というのも妙に納得してしまいます。

さて、そんな花はきれいだけど、あまり目立つことのないヤブマメも、奈良時代の日本最古の歌集である万葉集に登場してきます。
第20巻4352番の、道の辺の茨のうれに延ほ豆のからまる君をはかれか行かむ（みちのへの うまらのうれに はほまめの からまるきみを はかれかゆかむ）という歌で、当時南方の護衛に派遣された、防ぐ人と書く防人（さきもり）が読んだとされていて、意味としては道の傍らの茨に絡むように伸びているヤブマメのよ

うに、私の心に絡みついて離れない愛しい妻をおいていかなければならないのかといったところでしょうか。
実際のところ、防人の任期は3年程度だったそうですが、生きては帰れないかもしれない立場にあった他の防人の歌と同様、悲しみに満ちた歌ではないでしょうか。

異常な暑さもおさまり、庭園を吹き渡る心地よい風に、多くの鳥たちも姿をよく見せるようになる季節、歩道の傍らで見つけると思わずハット息をのんでしまう可憐な花と、そんな花に古の人が感じた想いを重ねてみるため、「みぬま見聞館」の自然庭園を、是非訪れてみてはいかがでしょうか。

ヤブマメ
生き残るため3種類の花を使い分けます

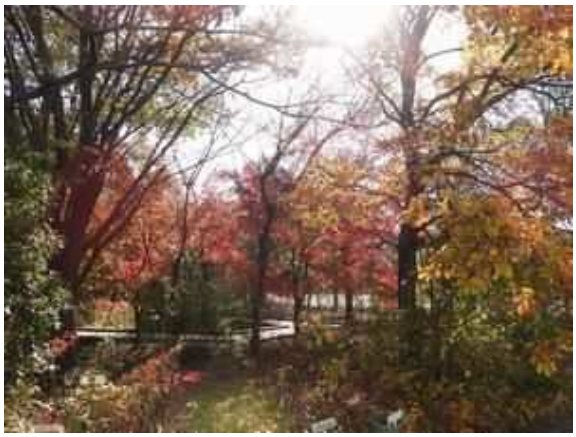
ヤブマメの花
可憐な花を咲かせます

ハナトラノオの花
キレイな姿を見せてくれます

タイワンホトトギス
独特な色彩の花が見られます

ミゾソバの花
可愛らしい小さな花がたくさん咲きます

ガマズミの実
真っ赤な実をつけ、存在を主張しています



自然庭園の秋
今年はまだまだ暑い日が続いていますが…

自然庭園の紅葉
鮮やかな紅葉が見られるといいですね！

アカハラ
例年だと10月半ばを過ぎたころ…

シロハラ
秋の訪れとともに…

ジョウビタキのオス
姿を現すのですが…

ジョウビタキのメス
今年もその姿を見られるといいですね！